

大学体育の目的および授業目標と評価方法

慶應義塾大学 村山 光 義

1. はじめに

この度、大学体育の目的・目標とその評価について私見をまとめる機会をいただいた。筆者は、これまで、大学体育の充実に向けた議論の場として、(公社)全国大学体育連合関東支部・慶應義塾大学体育研究所共催シンポジウム(慶應義塾大学体育研究所, 2015; 2017; 2018; 2019; 2020; 2021a; 2021b)、日本体育学会第70回大会組織委員会企画シンポジウム(村山, 2019)などを企画し、大学体育の意義と大学教育における役割を明確化し、大学体育教員の存在価値を高めるための検討を行ってきた。これらの議論のスタートは「大学生をどう育てるか 教養体育からの発信」というテーマであった。そして、「リーダーシップ教育」、「五輪教育とスポーツボランティア」、「スチューデント・ファーストによる大学体育・スポーツ」など、大学体育による学生教育への新たな可能性を議論した。2019年には、日本体育学会において「大学体育教員の使命を考える～教養体育の担い手の育成に向けて～」というシンポジウムを企画し、さらに共催シンポジウムでも同テーマを深めた。その結果、「一体、体育とは何を教えるものであるか」という根本的な問いを再度共有することが、これからの大学体育・教員育成において必要との認識に立った(慶應義塾大学体育研究所, 2020)。続いて、新型コロナウイルス感染症の拡大下、「オンライン体育実技の取り組み事例」を共有し、大学体育の意義と授業目標について再び考察する中、「成績評価」についても議論を広げることとなった。

以上のように、これまで多様な側面から議論を重ねてきたが、その中心は大学体育の理念を考え、大学生への教育にどう貢献するかという点で一貫している。一方、後述するように大学改革においては学士力の保証につながる3つのポリシーを基礎に「目標と評価の一体化」による教学マネジメントの強化が求められている。この点を踏まえ、大学体育の目的・目標と評価、さらに我々教員が取り組むべき課題を述べたい。なお、大学体育の授業形態には講義、実技、その両者を

行う演習があるが、体育においては実技で展開される点に教育的な特徴があり、かつ教員に求められる資質を規定していると考えられる。よって、本稿は実技を行う「大学体育実技・演習」を念頭においている。

2. 体育の目的を再確認する

大学体育の目的と目標について論じる上で、目的とは各授業の最終的なゴールを指し、授業目標は目的達成の実践過程にある、各授業内のいくつかの課題と捉えられる。従って、大学体育の目的を議論するためには、教育理念を含む包括的な視点が必要であり、授業目標についてはその達成が目的にどのように繋がっていくかという視点が必要である。そこで大学体育の目的を議論するため、まず「体育」の目的・理念について考えてみる。

2.1. 体育の目的の哲学的考察

久保(2010)は、体育は「身体に関する教育」であり、その目的は「身体の教育=身体の発達」、「身体を通しての教育=人格の発達」、「運動教育=身体運動の理解」、「スポーツ(運動文化)の教育=スポーツ(運動文化)の伝承」の4つであるとしている。さらに、この目的のために実践する学習課題が「目標」であり、身体に関する学習課題を教授者が学習者に働きかけ、学習する相互作用が体育であるとしている。佐藤(1993)も、体育は教育がそうであるように、人々のかかわりにおいて成立する関係概念であり、ある目標(条件)に方向づけられながら教師(作用項)が学習者(被作用項)に身体活動・スポーツ(媒体項)を介して働きかけるものであり、各項を独立変数とみならず関数として定義できるとしている。そして、体育の普遍的目的は「ヒトの身体面からの人間化」であり、媒体項にはその実現に資するものが選択されるとしている。

また、高橋(2018)は体育の理念の代表的な枠組みとして、歴史的に「身体の教育(明治から終戦まで)」、「スポーツによる教育(戦後から高度経済成長期:

1970年代まで)、「スポーツの中の教育(1970年代以降)」の3つが推移してきたと述べている。そして、現在はスポーツや運動を健康のためだけでなく生涯の楽しみとして享受すべきという考え方により、スポーツを行うことが体育の目的として追求されるようになったが、3つの理念は互いに交錯する形で今の体育を形づくっている、と述べている。また、体育は身体活動を通じた教育であるとし、スポーツという表現を身体活動と改め、体育の理念を考えるべきとしている。スポーツはそれ自体で存在する文化概念であり、教育概念である体育の教材となるが、スポーツ概念の総合的理解が遅れている(佐藤, 1999)ことにより、体育とスポーツの混同や体育の目的の曖昧化への批判もある(久保, 2010; 佐伯, 2006)。

2.2. 身体体験の意味と新たな身体教育の可能性

さて、体育の目的について体育哲学に依拠してレビューしてみた。釈迦に説法であったかもしれない。しかし、筆者には体育の本質を考えることは、常に大学体育教員として自己の授業の意味や成果について確認・再考させられるものである。筆者は体育学部を卒業したが、“体育”を冠する学部・学科が“スポーツ科学”となり、教員養成以外のコースが主流となっている昨今、大学体育を担う現在の教員にとっても、上記の体育の理念が深く理解される必要性を強く感じる。これを踏まえて、体育の目的について、もう1点、考察を加えたい。

久保(2010)は、身体教育に「形成」「自己形成」「生成」の3つの次元があると述べている。形成とは、“教える—学ぶ”関係により体力・技能などを直接身につける「身体の発達」であり、自己形成とは、意志・精神力・態度などの心理的側面を「社会的体験」として実践を通じて身につけるものである。この2つは、体育の目的として理解しやすい。一方、生成とは、身体の「無意識の潜在的なたらき」により適切な身体運動が可能となる体験(できなかつたことが実現するようになる)により「行動の有用性を超えた意味世界のつくりかえ」がなされるものである(久保, 2020)。つまり、身につける、といった有用性に基づいた企てではなく、「ああ」「おお」としか言い表せないような身体の体験自体に豊かな意味が見いだされ、身体教育の新たな可能性を見出すものとして重要であると述べている。

例えば、筆者のフライングディスクの指導経験においても、学生がディスクをまっすぐ正確に飛行させる

スローができた時、その浮遊するディスクを見ながら感動と興奮で思わず「おお」と声にすることがしばしばある。その成功の要因は、手首のスナップによる強い回転とディスク角度のコントロールなのだが、そうした意図や理解がなくとも自己の身体が空間の中で成し遂げた動作とともに生じた知覚に快感や意味を見出し、その実践の虜となる可能性がある。言葉で言い表せなくても、わかる=暗黙知、できる=身体知、が創生されるのである。佐伯(2006)も、教科としての体育は、決してスポーツ実践そのものに帰するものではなく、「スポーツ実践の人的意味の学習」「例えば『身体知』のような身体経験の人的発達の意味を含むまだ未開発の豊かな教育的可能性」を考える必要がある、そのことによって体育は独自の教育を展望することができる、としている。我々は、こうした暗黙的な身体知の獲得過程に生じる、個々の実体験による自己成長の意義を知り、体育特有の教育的機能であることを認識しつつ、人間の身体活動の意味を深く追及する必要があると考える。

3. 大学体育授業の目的と目標を考える

体育の持つ本質的な目的を見てきたが、大学体育の目的はそれと全く変わらないものであろうか?そもそも、大学には小・中・高等学校のように学習指導要領で規定された教科としての体育は存在しない。学習指導要領がないから、大学体育は“教育としての体育”と同じである必要はないと言えるかもしれない。また、大学体育を広く捉え、正課授業以外の課外活動やキャンパスライフの中にもその教育的意義は認められる(日本学術会議, 2010)。しかし、学生の成長に寄与する大学体育の中心はやはり授業であり、その内容は体育が持つ本質的な教育特性に沿っていることが重要である。

3.1. 21世紀型市民としての能力の育成と大学体育実践の寄与

周知のように、2008年、中央教育審議会(以下、中教審と略す)の大学分科会は「学士課程教育の構築に向けて」を答申し、グローバル化する知識基盤社会に 대응できる「21世紀型市民」として大学学士教育改革の必要性を指摘した(中央教育審議会, 2008)。その改革のため、3つのポリシー(ディプロマ・カリキュラム・アドミッション)の策定が求められ、各大学は個別の教学経営目標を掲げることになった。従ってまず、大学体育も各大学・学部等のポリシーに合わせて

開講され貢献すべきであり、大学体育の目的は多様なポリシーに添うものであるという考え方が成り立つであろう。

例えば、中教審(2008)による学士課程(=大学)の学習成果の参考指針にある汎用的技能の1つに「コミュニケーション・スキル」、態度・指向性として「チームワーク・リーダーシップ」、「倫理観」などが挙げられており、多くの大学のディプロマポリシーに含まれている。そして、大学体育がこのポリシーに実技・演習教育の特色を通じて応え得るとの認識から、こうした能力の育成を授業目標に掲げることは望ましいことである。事実、こうした汎用的技能や態度・姿勢の獲得を成績評価の観点にする大学があることが筆者らの調査でも示されている(村山ら, 2022)。近年は中教審のみならず、文部科学省(2015)もOECDとの政策対話を通じ、学習指導要領の改訂のみならず高大接続改革において身につけるべき資質・能力に人間性や社会的スキルを挙げ、また、経済産業省では2006年に社会人基礎力を提唱し、さらに「人生100年時代の社会人基礎力」を養うリカレント教育を大学が担う必要性を示した(経済産業省, 2018)。

こうした多くの能力概念が提案される中、大学体育の実践が様々な能力の育成に効果的に作用することも多くの研究によって示されてきた。紙面に限りがあるため、項目だけを概略的に挙げれば、例えば、WHO提唱のライフスキル(中井, 2018; 奈良, 2020; 西田・橋本, 2009; 野口ら, 2018; 島本・石井, 2007; 島本・山本, 2018; 瀧本ら, 2018; 東海林・島本, 2017)、社会人基礎力(引原ら, 2016; 石道ら, 2015; 2016; 2017; 金田ら, 2018; 前田ら, 2022; 佐藤ら, 2022)、自己効力感(中山ら, 2014; 野口ら, 2015; 西田, 2011; 重藤ら, 2020; 須崎・杉山, 2016; 2017)及び社会的スキル(野口ら, 2013)などである。また、これらの能力に重なる形でコミュニケーション能力やリーダーシップの育成にも効果が認められている。つまり、大学体育が21世紀型市民の育成に寄与することは教育実践の成果からエビデンスを持っている。

3.2. 体育の理念を基礎にした目的と目標の区別

しかしながら、求められるポリシーや能力に合わせて授業を構築する上で、特定の資質・能力にフォーカスしながらも体育の本質的な理念を基礎に置くことは可能であり、限定的にならないことが重要であると考えられる。先に見てきたように、体育は身体や技能の形成、

実践による精神力や態度の自己形成、自己の身体で生成される体験などが複合された人間形成の営みである。21世紀市民として求められる社会的スキル・ライフスキル・コミュニケーション能力などは運動やスポーツを教材としなくても身につくかもしれないし、そもそも人間形成は大学における体育以外の授業科目でも目指されている。従って、例えばコミュニケーション能力を身につけることは授業の目標の1つであり、そのみが大学体育の目的とはならない。つまり、大学体育の目的と目標は区別されるべきであり、複合的かつ総括的な目的にむけた有効な目標を多面的に掲げる必要がある。この点は、橋本(2021)の指摘と同じであり、大学体育の存在意義を強く主張する上で重要である。さらに橋本ら(2021)は、大学体育の教育的意義を、「運動技能獲得」、「健康教育」、「スポーツに対する態度」の3つに整理し、さらに「自己成長」という意義を加え、新たに“挑戦的課題達成型授業”を提唱している。体育の本質的理念を基礎において大学体育の使命を具現化する取り組みと言える。

誤解の無いように付け加えれば、これまで積み上げられた体育授業の実践がもたらす汎用的技能等の能力獲得への効果に関する研究は大変重要であり、学生に授業実践の意味や目標をアカデミックに提示し、行動変容を導くための強い武器である。それを科学的に用いることは目標と評価の関係を強固にする。ただ、1つの効果を求めることが目的となってしまうと、それは必ずしも体育である必要がない。前項に述べた「身体の生成」のような教育的価値は、目標に掲げて到達度をはかることが容易ではないかもしれないが、体育の目的として重視したいものである。無論、こうした目標もなく、「単にスポーツを楽しませている」だけでは体育不要の批判を免れず、組織も教員も体育の目的と目標をしっかりと主張する必要がある。授業目標が求められる大学のポリシーに合致することは必要条件となるが十分条件ではなく、複合的な目標による授業デザインが大切であろう。

4. 授業目標に準拠した評価

4.1. 厳格な成績評価が求められてきた背景

2008年、中教審は大学における成績評価について、「個々の教員の裁量に依存して組織的な取り組みが弱い」ことを指摘し、学士力の保証として「厳格な成績評価」に取り組むことを課題とした(中央教育審議会, 2008)。さらに、学修成果の評価に関する共通の尺度や考え方(アセスメントポリシー)を授業の目標に合

致させ、大学教育の改善に組織的に取り組む教学マネジメントの推進が求められている（中央教育審議会、2018）。この改革の推進においては、大学には学習指導要領のような指針がなく、また、教員の資格制度もないため、大学教員が教育評価について深く学び、授業の設計能力を組織的に高める必要があると考える。教育の本質を捉え、学習指導要領や初等・中等教育課程の取り組みも参照し、高大接続改革に通じる大学の教学マネジメントの理論構築をしていくことは極めて重要である。

4.2. 大学体育における評価の実態と課題

大学体育においても、授業の構成要素である目的・内容―評価の内の「評価」が欠落しており、成績評価基準統一の取り組みが必要であることが指摘されている（木内ら、2016）。しかし、これまで大学体育の成績評価・方法に関する研究報告は限られており（例えば、榎本ら、2014；金谷ら、2007；松岡、1997；奈良ら、2000）、特に教学マネジメントが求められるようになった近年も、評価問題に対する学術的アプローチは積極的とは言えない状況にある。そこで、筆者らは、まず大学体育（実技・演習）の成績評価の観点およびその方法に関する実態調査を行った（村山ら、2022）。その結果、評価観点は、態度・意欲、技術・技能、理解・知識、出席の4つに分類でき、これらを組み合わせて評価が行われていたが、態度を含む割合は80%以上と高く、出席を含むものは10%程度と少数であった。先行研究との比較から、「技術・理解・態度」が評価観点の基軸であることが確認されたが、出席の採用は約20年前の9割（奈良ら、2000）から大きく減少している。出席に関しては、日本技術者教育認定機構（JABEE）が「単位を取得するためには、授業に出席することは、当然である」（日本技術者教育認定機構、2017）と指摘し、これに文部科学省も同様の見解を示したことが反映され、多くの大学が観点から外したと考えられた。また、態度を観点とする割合が多いが、その中にはコミュニケーション、協調性、共同的・支援的かわり、スポーツマンシップ、社会人基礎力などの具体的能力を挙げる回答も少数ながらあり、今後も各大学のポリシーと連動する形で具体的な資質・姿勢などを達成目標とし、評価する事例が増えると考えられる。しかしながら、複数の観点で評価する際の配点比率を明記した回答が得られたのは約20%、また、約40%は「配点等を担当教員に一任している」と回答した。従って、評価の統一性や各観点が適切に評価さ

れているか、透明性は保たれているかなど、組織的な取り組みによる評価の厳格化には、依然として課題があることが示された。

4.3. パフォーマンス評価とルーブリック

ここで、教育評価に関する近年の流れを簡単に見てみたい。松下（2010）は、新たに提唱されてきた大学時代に身につけるべき能力（学力・社会人基礎力など）の評価にはオルタナティブ・アセスメントが適し、その代表的な評価方法に「ポートフォリオ評価」、 「真正の評価」、 「パフォーマンス評価」があるとしている。ここで、オルタナティブ・アセスメントとは、従来の測定中心で標準化を目的とする総括的評価に対し、教育の改善や指導などを目的とした形成的評価へパラダイムシフトしたものであり、世界的潮流ともなっている。このオルタナティブ・アセスメントは既に初等・中等教育課程において取り組みが進み、「目的に準拠した評価」の手法として用いられている（田中、2013）。その中でもパフォーマンス評価は、行動・見えるパフォーマンスを観察して個人の能力を評価する点で、体育に親和性が強いと考えられるが、これに対となって用いられるのが「ルーブリック」である。ルーブリックとは、評定尺度とその内容を記述する指標からなる評価指針であり、学習者の自己評価の指針ともなるものである（田中、2013）。

筆者らは、直近の公社）全国大学体育連合関東支部・慶應義塾大学体育研究所共催シンポジウムで「ルーブリックの活用から体育実技の目的と評価を考える」をテーマとして議論を行った（報告書作成中）。そこでは、大学体育におけるルーブリックの活用は必要性を認識しているものの実際の事例が少なく、また、その意義や導入に懐疑的な意見もあることが実態として示された。しかし、活用の事例報告からは、組織的な導入に苦労もあるが目標と評価の議論が深まり、学生にも自己評価を通じた学びの「ガイド」として機能する、といったことが示された。今後、高等学校までの体育における活用例にも学び、大学体育におけるルーブリックの開発を進めることが重要であると考える。

4.4. 厳格な成績評価にむけて

鈴木（2012）は企業における人事考査で評価される側の納得感を担保する視点として「評価の透明性」、 「評価基準の明示」、 「自己のメタ認知」、 「結果のフィードバック」、 「評価者のレベルアップ」があるとし、こ

れらは厳格な成績評価に求められることに一致するとともに、これによる学生の納得感を高めることが重要であるとしている。「評価の透明性・基準の明示」は、到達目標とその評価基準をシラバスやルーブリック、ポートフォリオなどの利用により共有することである。また、成績評価は目的を構成する複数の目標（観点）の評価の総括として最終的な評定として与えられるため、その総括の方法・観点の比率なども重要な情報となる。「自己のメタ認知」とは、学生が自己の学びを振り返り客観化することであるが、目標とその達成基準が明確なほど進めやすく、これにより効力感や達成感が強化され自己効力感（自信や信念）も生み出される（鈴木, 2012）。こうした振り返りの機会とともに学習の意味を伝え、自己の改善の方向を示す「結果のフィードバック」を授業内で都度学生に与えることも重要である。そして、教員側の「レベルアップ」として常に学生の観察技術、教材や指導内容の工夫により学生との良い信頼関係を築く努力が必要である。

5. おわりに

本稿では、21世紀型市民の育成として学士力の保証が求められている高等教育の現状を踏まえつつ、体育教育の目的の再確認、大学体育授業における目的と目標の整理、さらにその目標に準拠した評価の在り方について述べてきた。授業を構成する上で、目的—内容—評価の連動が必要であるが、我々教員は例えば、実技授業の「内容」に目が行きがちではないだろうか？学生が実践する内容も重要ではあるが、まず何を学ばせるのかという目標があり、どう評価できるかを見通し、学生の納得感を高める必要がある。こうした、授業理念を立て、評価方法を先に構想することは「逆向き設計」と呼ばれ、近年、授業設計の手法として用いられている（境ら, 2022）。本稿でも触れたパフォーマンス評価やルーブリックも授業改善に向けた教育学の手法である。我々は、体育・スポーツの実践指導に加えて、その基礎となる教育理論を積極的に学び、活用する必要がある。無論、実技指導の能力を高めることも重要であるが、教育を科学的に理解した教授能力を備え、組織的に教育システムの改善に取り組むことが Faculty Development の課題ではないだろうか。大学教育学会（2004）も、大学教員は自己の研究テーマの追求とともに大学教育研究をもう一つの専攻として研究することが必要であり、教養教育の発展に不断の努力が不可欠であることを提言している。

最後に、大学体育の将来について触れたい。

Society4.0のインターネット基盤の情報化社会は大学の学びを変容させ、コロナ禍で一層鮮明になったように、大学・キャンパスの意味を変えつつある。オンラインコミュニケーションの加速に対し、大学体育の意義が再認識されるが、中教審は「2040年に向けた高等教育に関するグランドデザイン」を答申し（2018）、IT・AI技術の発展と高度化が進む Society5.0の時代に備える必要性を示した。奥野（2020）はこの検証に際し、Society5.0に代表される時代の変化は予測不能な部分があるとしながらも、その変化を受け入れる時、「時代が変わっても、技術が変わっても、人間として大切なものや、変わらない（変えていけない）ものがあるはずで、それを知るための議論をしたいと願う」と述べている。大学体育もさらなる時代の変化に応じ、その教育的意義をより明確にアピールしていくことが求められよう。大学体育理念を科学的に追求し、近未来のために再度構築するときに来ているのではないだろうか。

引用文献

- 中央教育審議会. 学士課程教育の構築に向けて, 2008. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm (2022年12月17日参照)
- 中央教育審議会. 学修の質保証の向上に関する取組について 大学分科会 制度・教育改革ワーキンググループ (第12回配布資料1), 2018. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryu/1403144.htm (2022年12月17日参照)
- 中央教育審議会. 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン, 2018. https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf (2022年12月17日参照)
- 榎本靖士, 松元剛, 吹田真士, 鍋山隆弘, 金谷麻理子, 奈良隆章. 共通体育における成績評価に関連する問題の検討. 大学体育研究, 36: 87-90, 2014.
- 橋本公雄. 研究ベースの九州地区大学体育連合70年を振り返る. 体育・スポーツ教育研究, 22: 5-14, 2021.
- 橋本公雄, 西田順一, 木内敦詞, 堤俊彦. 自己成長をはかる大学体育 挑戦的課題達成型体育授業の理論と実践. 花書院, 2021.
- 引原有輝, 森田啓, 若林斉, 金田晃一. 実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響. 大学体育学, 13: 16-25, 2016.

- 石道峰典, 西脇雅人, 中村友浩. 選択科目の体育実技授業を履修する大学生の社会人基礎力の特徴について. 大学体育研究, 37: 1-10, 2015.
- 石道峰典, 西脇雅人, 中村友浩. 体育実技授業における社会人基礎力育成を意図した介入効果の検証. 大学体育学, 13: 26-34, 2016.
- 石道峰典, 西脇雅人, 中村友浩. 体育実技授業による visual analog scale (VAS) 法を用いた社会人基礎力の評価に関する検討. 大学体育スポーツ学研究, 14: 67-78, 2017.
- 金谷麻理子, 銅山隆弘, 三木ひろみ, 成瀬和弥, 堀出知里, 松元剛, 鍋倉賢治, 船田裕雄, 遠藤卓郎, 山田幸雄. 大学体育における成績評価をどうするか?. 大学体育研究, 29: 53-59, 2007.
- 金田晃一, 引原有輝. 学外活動を伴う集中型の大学体育授業が受講学生の社会人基礎力におよぼす影響: ゴルフ種目を対象に. 大学体育スポーツ学研究, 15: 29-30, 2018.
- 慶應義塾大学体育研究所. 2014年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書, 2015. <https://ipe.hc.keio.ac.jp/wp-content/uploads/2017/04/75cbb9a1186deec4b2896410df577d3a.pdf> (2022年12月17日参照)
- 慶應義塾大学体育研究所. 2016年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書, 2017. <https://ipe.hc.keio.ac.jp/wp-content/uploads/2017/04/9763777aa6b7ce2289bd3a8572911613.pdf> (2022年12月17日参照)
- 慶應義塾大学体育研究所. 2017年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究シンポジウム「オリンピック教育とスポーツボランティア～東京 2020 に向けた大学・教員・学生の関わり～」報告書, 2018. <https://ipe.hc.keio.ac.jp/wp-content/uploads/2013/02/66c27145694fe900c0cfe199a9fde8a3.pdf> (2022年12月17日参照)
- 慶應義塾大学体育研究所. 2018年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書, 2019. <https://ipe.hc.keio.ac.jp/wp-content/uploads/2020/06/4032906916a90cf0e226be371713cdf7.pdf> (2022年12月17日参照)
- 慶應義塾大学体育研究所. 2019年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究シンポジウム「大学体育教員の育成を考える」報告書, 2020. <https://ipe.hc.keio.ac.jp/wp-content/uploads/2013/02/e2a3b67aealed3e6a9b155af64605f60.pdf> (2022年12月17日参照)
- 慶應義塾大学体育研究所. 2020年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書, 2021a. <https://ipe.hc.keio.ac.jp/wp-content/uploads/2021/02/254e64f040c505cb94c5b80051ae431c.pdf> (2022年12月17日参照)
- 慶應義塾大学体育研究所. 2021年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書, 2021b. <https://ipe.hc.keio.ac.jp/wp-content/uploads/2022/02/6f0891c0f4e5b3c2e842af9aa220e050.pdf> (2022年12月17日参照)
- 経済産業省. 「人生100年時代の社会人基礎力」と「リカレント教育」について 我が国産業における人材力強化に向けた研究会 - 報告書, 2018. https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_3.pdf (2022年12月17日参照)
- 木内敦詞, 松元剛, 日野克博, 富川理充, 奈良隆章. 大学体育の成績評価を考える. 大学教育学会誌, 38(2): 113-117, 2016.
- 久保正秋. 体育・スポーツの哲学的見方. 東海大学出版部, 2010.
- 久保正秋. 「生成としての身体教育」の様相, 体育学研究, 65: 849-865, 2020.
- 前田奎, 鈴木楓太, 東原文郎, 成相美紀, 吉中康子, 松木優也, 池川哲史. コロナ禍での遠隔による大学スポーツ授業の前後における社会人基礎力の変化. 大学体育スポーツ学研究, 19: 62-72, 2022.
- 松岡信之. 国際基督教大学 (ICU) における成績評価. 大学体育, 24: 33-42, 1997.
- 松下佳代. 新しい評価のパラダイム — パフォーマンス評価の観点から — . 河合塾編, 初年教育でなぜ学生が成長するのか 全国調査から見えてきたこと. 東信堂, 2010.
- 文部科学省. OECD におけるキー・コンピテンシーについて 中央教育審議会審議資料. https://www.mext.go.jp/content/1377021_4_2.pdf (2022年12月17日参照)
- 村山光義. 大学体育教員の使命を考える～教養体育の担い手の育成に向けて～. 日本体育学会第70回大会予稿集: 17, 2019.
- 村山光義, 寺岡英晋, 永田直也, 東原綾子, 福士徳文, 稲見崇孝, 奥山静代, 佐々木玲子. コロナ禍における大学体育実技の成績評価方法に関する実態調査. 大学体育スポーツ学研究, 19: 134, 2022.
- 中井聖. 学習形態の異なる大学体育実技授業実施前後のライフスキルの特徴とその変化. 大学体育スポーツ学研究, 15: 46-56, 2018.
- 中山正剛, 田原亮二, 神野賢治, 丸井一誠, 村上郁磨. 学士課程教育における体育の介入授業が及ぼす長期的な効果に関する研究 — 授業終了1年後の学士力関連スキルと運動行動に着目して — . 大学体育学, 11: 65-78, 2014.

- 奈良雅之, 小原晃, 加藤純一, 本間玖美子, 寺山由美, 錦織由紀. 一般教育における必修としての大学保健体育科目の授業目標と成績評価に関する調査検討: 実技科目を中心に. 大学体育, 28: 25-28, 2000.
- 奈良隆章, 木内敦詞. 自己開示によるライフスキル向上を意図した大学体育授業の設計. 大学体育スポーツ学研究, 17: 38-47, 2020.
- 日本学術会議. 21世紀の教養と教養教育, 2010. <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-tsoukai-4.pdf> (2022年12月17日参照)
- 日本技術者教育認定機構. 認定基準及び審査に関するQ&A (2017年8月改訂). 2017. https://jabee.org/about_jabee/faq (2022年12月17日参照)
- 西田順一, 橋本公雄. 初年次学生の社会的スキル改善・向上を意図した大学体育実技の心理社会的有効性. 大学体育学, 6: 91-99, 2009.
- 西田順一. 大学生の水泳・水中運動の恩恵と負担の測定 意思決定バランス尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 大学体育学, 8: 13-23, 2011.
- 野口和行, 村山光義, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子. 体育実技受講学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討: 授業形態の違いによる比較. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 54: 9-16, 2015.
- 野口和行, 村山光義, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子. シーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」受講者のライフスキルの獲得: ふりかえりの記述による質的検討. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 57: 19-31, 2018.
- 野口和行, 須田芳正, 村松憲, 村山光義, 加藤大仁. 学生の社会的スキルを目指した体育実技実践の試み. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 52: 11-20, 2013.
- 奥野武俊. グランドデザイン答申に対する期待と懸念. 大槻達也, 小林雅之, 小松親次郎編, 2020年以降の高等教育政策を考える グランドデザイン答申を受けて. 桜美林大学出版会, 2020.
- 佐伯年詩雄. これから体育を学ぶ人のために. 世界思想社, 2006.
- 境一三, 山下一夫, 吉川龍生, 縣由衣子. 外国語教育を変えるために. 三修社, 2022.
- 佐藤臣彦. 身体教育を哲学する, 北樹出版, 1993.
- 佐藤臣彦. 体育学の対象と学的基礎. 体育学研究, 44: 483-492, 1999.
- 佐藤和, 引原有輝, 金田晃一. 大学体育受講者のパーソナリティと社会人基礎力得点の関係. 大学体育スポーツ学研究, 19: 29-37, 2022.
- 政策研究所. 平成29年度文部科学省高等教育局委託事業『国内大学のGPAの算定及び活用に係る実態の把握に関する調査研究』報告書. 2018. https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1410961.htm (2022年12月17日参照)
- 重藤誠市郎, 山崎享子, John Patrick Sheahan, 奥田功夫, 長谷川望, 一川大輔. 主体的にスポーツ実技を選択履修する大学生の運動セルフ・エフィカシーとレジリエンスの特徴 — スポーツ実技履修者と健康スポーツ心理学履修者の心理的変容からの検討 — . 大学体育スポーツ学研究, 17: 3-11, 2020.
- 島本好平, 石井源信. 体育の授業におけるスポーツ経験が大学生のライフスキルに与える影響. スポーツ心理学研究, 34: 1-11, 2007.
- 島本好平, 山本浩二. 心理社会的な成長につながる気づきのライフスキル獲得への影響: 体育授業における自己開示からの検討. 大学体育スポーツ学研究, 15: 63-71, 2018.
- 須崎康臣, 杉山佳生. 自己効力感および自己調整学習方略が大学生の体育適応感に及ぼす影響. 体育学研究, 61: 91-102, 2016.
- 須崎康臣, 杉山佳生. 大学生を対象とした体育授業における自己調整学習方略と体育自己効力感を促すための介入プログラムの効果. 体育学研究, 62: 227-239, 2017.
- 鈴木誠. 納得感を高める次世代型教養教育. 山地弘起, 橋本健夫編, 学生の納得感を高める大学授業. ナカニシヤ出版, 2012.
- 高橋徹. 初めて学ぶ体育・スポーツ哲学. みらい, 2018.
- 瀧本真己, 木内敦詞, 石道峰典, 中村友浩, 西脇雅人. 大学体育実技授業の振り返り文章数を多く記述するほどライフスキルの獲得が促進される: 大学体育授業を対象とした縦断研究. 大学体育スポーツ学研究, 15: 3-11, 2018.
- 田中耕治. 新しい「評価のあり方」を拓く — 「目標に準拠した評価」のこれまでとこれから — . 日本標準, 2010.
- 東海林祐子, 島本好平. 大学体育におけるライフスキル獲得のための授業支援ツール体育ノートの導入とその効果の検討. 大学体育学, 14: 3-15, 2017.